



通所サービスを利用する虚弱高齢者における主観的疲労感と栄養状態・食事満足感との関連

著者	佐藤 舞
号	83
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医博(障)第149号
URL	http://hdl.handle.net/10097/57965

氏 名	さとう まい 佐藤 舞
学 位 の 種 類	博士 (障害科学)
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 26 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
研 究 科 専 攻	東北大学大学院医学系研究科 (博士課程) 障害科学専攻
学位論文題目	通所サービスを利用する虚弱高齢者における主観的疲労感と栄養状態・食事満足感との関連
論文審査委員	主査 教授 出江 紳一 教授 上月 正博 教授 辻 一郎

論 文 内 容 要 旨

通所サービスを利用する虚弱高齢者は、入浴・食事・運動などの複合サービスを受給する。「食事」は栄養状態の維持だけでなく、生きがいや楽しみとして精神的な満足感を得ることのできる重要なサービスであるが、食事時に長い時間をかけていたり、食事を中断したりする虚弱高齢者が見受けられる。特に嚥下障害を有する場合、食事時間が長くなる傾向がある。通所サービスでは、昼食前に入浴や運動プログラムが設けられていることから、これらによって生じる疲労感が、食事時間の延長につながり栄養状態の不良や食事の満足感に影響している可能性がある。また嚥下障害を有する高齢者は有しない高齢者と比較して、主観的疲労感が、より強く食事に影響することが推測されるが、明確ではない。

そこで本研究の目的は、通所サービスを利用する虚弱高齢者を対象に、主観的疲労感の程度と栄養状態、食事満足感との関連を検討することである。またその関係を嚥下障害を有する高齢者に絞って検討することである。

方法は介護老人保健施設を利用する高齢者 163 名を対象とし、2012 年 8 月から同年 10 月に調査を実施した。主観的疲労感は、慢性的疲労感 (FACIT-F) と 2 回分の昼食前と昼食後の一時的疲労感 (POMS) を調査した。平均値によって主観的疲労感の高い群と低い群の 2 群に分け、また昼食後に疲労感が上昇する群と下降する群の 2 群に分けた。また、抑うつ、嚥下障害の有無等を調査し、診療録より性別、年齢、介護度、BMI、アルブミン値等を得た。昼食時に食事時間を測定し、主観的疲労感との関連を分析した。栄養状態の評価は、BMI<18.5 もしくはアルブミン値 ≤ 3.5 を不良群、BMI ≥ 18.5 もしくはアルブミン値 > 3.5 を示す対象者は良好群として 2 群に分け、主観的疲労感やその他の要因との関連を分析した。また食事満足感は、食事の楽しさや美味しさについて問うた 2 項目を設定し、主観的疲労感やその他の要因との関連を分析した。

その結果、条件を満たした対象者は 108 名 (男性 46 名、女性 62 名)、年齢は 60~95 歳 (平均 \pm 標準偏差; 77.9 ± 8.9 歳) であった。栄養状態のデータが得られた 91 名中、栄養状態不良は 29 名 (26.9%)、食事時間平均は 15.3 ± 6.0 分であった。食事満足感平均は 3.9 ± 1.7 点であった。食事時間は、食事前後の一時的疲労感の変化が有意に関連した ($\beta = 0.28, p < 0.05$)。栄養状態不良のリスク要因は食事時間が長いこと (OR 1.18, 95%CI: 1.05 - 1.33) と、慢性的疲労感が高いこと (OR 5.97, 95%CI: 1.68 - 21.3) が有意な関連を示した。嚥下障害リスク有り群においても同様の結果となった。また慢性的疲労感のオッズ比は、全サンプル解析では 6.91 であったのに対し、嚥下障害あり・疑い有群では 4.54 であった。食事満足感はこの要因とも関連はみられなかった。

本研究の結論として、通所サービスを利用する虚弱高齢者において、主観的疲労感のうち食事

(書式12)

前後の一時的疲労感の変化は食事時間を介し栄養状態と関連することが明らかになった。また主観的疲労感のうち慢性的疲労感も同様に栄養状態と関連することが明らかになった。また嚥下障害あり・疑い有群において、より強く慢性的疲労感が栄養状態と関連するとは言えなかったが、慢性的疲労感は、栄養状態と関連することが示唆された。また主観的疲労感は食事の満足感には関連しなかった。

審査結果の要旨

博士論文題目 通所サービスを利用する虚弱高齢者における主観的疲労感と栄養状態・食事満足感との
関連

所属専攻・分野名 障害科学専攻・肢体不自由学分野

氏名 佐藤 舞

現在、我が国の介護サービス利用者のうち 1405.5 千人が通所サービスを利用している。通所サービスにおいて、高齢者は半日から 1 日にわたり、入浴・食事・運動などの複合サービスを受給することから、これらのサービスを実施する施設は、利用者の体力や能力を考慮して疲労に注意しながらサービスを提供することが求められる。しかし通所サービス施設の昼食時、摂取の自発的中断や、長時間摂取する虚弱高齢者が見受けられる。昼食前に入浴や運動プログラムが設けられていることから、これらの食事時の現象には、昼食前のサービスによって生じる疲労が影響している可能性があるが、高齢者における疲労感と食事に関する先行研究に着目した研究はほとんどなく、疲労感の影響を検討した研究は十分に行われていない。

本論文は、2012 年 8 月から同年 10 月に介護老人保健施設を利用する高齢者 163 名を対象とした調査であり、主観的疲労感（FACIT-F）と昼食前と昼食後の一時的疲労感（POMS）を調査し、平均値によって主観的疲労感の高い群と低い群の 2 群に分け、また昼食後に疲労感が上昇する群と下降する群の 2 群に分けた。さらに昼食時に食事時間を測定し、主観的疲労感との関連を分析した。栄養状態の評価は、BMI とアルブミン値によって不良群と良好群の 2 群に分け、主観的疲労感やその他の要因との関連を分析したものである。

その結果、通所サービスを利用する虚弱高齢者において、主観的疲労感のうち食事前後の一時的疲労感の変化は食事時間を介し栄養状態と関連することが明らかになった。また主観的疲労感のうち慢性的疲労感も同様に栄養状態と関連することが明らかになった。また嚥下障害あり・疑い有群において、より強く慢性的疲労感が栄養状態と関連するとは言えなかったが、慢性的疲労感は、栄養状態と関連することを明らかにした。

本論文により、通所サービス提供施設での食事時には嚥下障害を呈しない利用者であっても食事時間が比較的長い傾向にある者への配慮が必要であることが示された。また、食事時の疲労感を増加させないために、食事時の動作を観察し、個人に合った食具が使用されているか否かなどといった食事環境への配慮や、経口摂取の安全性を確保しながら機能に応じた食事介助の技術を持つ施設職員の育成も必要となると考えられる。また食事中や食後の一時的疲労感に対する利用者への施設職員による声掛けや、食後のサービス提供を十分な休息をとってから行うなどの取り組みを今後施設内で検討する必要があることが示された。

以上、本論文は通所サービスを利用する高齢者の日常生活に関する研究の発展に寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（障害科学）の学位論文として合格と認める。